資料紹介

伏見宮旧蔵『雑抄』巻十四

該書は、昭和三十三年に伏見家より将来された伏見宮旧蔵楽書類と共に当部の所管へ移されたもので、移管当初は他の楽書断簡、雑文書や帰属不明の包紙等と一括の箧中にあった。その後これらの雑書類のうち幾つかの断簡、包紙は楽書への帰属が判明し、本体と併せ整理を加えたが、当該の『雑抄』巻十四は他に僚簡を得ず、その内容も唐詩の総集であって、本邦中近世期の譜や伝書、伝授書類等を中心とする楽書とは一線を画することから、単独での修補、整理の形を採ることとした。次に該書の形状等を、修復後の形に即いて誌して置く。

雑抄　亡名撰〔平安後期〕写　一帖（伏・二〇三六）

存一巻十四

当部新補茶色包背表紙（二八・七×一五・三糎）、次で後補茶地紺色雷文繋花菱文裂表紙（二八・五×一二・七糎）を存する。粘葉装（一二葉、四八面）。もと全紙剝離していたが、毎折外側のみ折目の前後に膠着痕を存して旧状が窺われる他、書脳部上辺に存する紙序数が現状に合致し本文の接属とも齟齬を来さないことから、当部にて虫損修補の上、旧装に復した。但し墨付部分の屈折を考慮して書脳部に補紙を加え、その部分で紙縒綴とする擬似的な方策を採った。巻首「雑抄巻第十四／曲下」と題し、唐人の楽府詩等三十六篇を収め、うち七篇は二乃至四句の抄出に止まる。先ず低一格で篇題を標して同行下に作者名を注し、改行して本文に入る。毎篇ののち改行。墨付は第二面より第四十五面に及び、一面に、折の外側で六行、内側で七行の書写、内外の差は外側での中央膠着部の回避による。押界（界高約二二・八、同幅約一・六糎）あり。字面高さ約二二・五糎。一筆で、概ね楷体によるが一部に草体を雑え、本邦平安後期の書写と思われる。行間、行脚に本文同筆の校字注記を存するが、これらは書写に際する誤りを自ら補うものであろう。第四十七面左肩に「世尊寺殿定賓卿雑抄巻第十四（朝倉茂入印）」の極札を貼布する。同札も剝離して別包に存したが、剝離痕に従って復原した。伝称筆者の藤原定実は生歿年未詳、伊房の男。後世にいわゆる世尊寺流の出身で、行成より第四世に当たる。治暦四年（一〇六八）の叙爵（『公卿補任』）より元永二年（一一一九）の致仕出家（『中右記』）に至るまで、能書としての事蹟に富む。固より本書の筆者として擬するには足らないが、書写年代の推定には見るべきものがあろう。また本書が伏見宮に収められた経緯については全く不明で、中近世期に於ける伏見宮の所蔵目録にも徴すべき記事を得ない。

本書の解題に当たって先ず述べて置くべきは、以下の考察に於いて、残存する巻十四のみの本文を基にする点であろう。本書は他に伝本を聞かず、本書に関わる外部徴証をも殆ど欠くことから、全体の結構、成立の事情や書写伝来等、典籍の解題について重要な諸件を凡そ明らかにし難い情況にある。このために、以下に記す所は専ら残存本文から導かれる事柄に限られ、失われた部分にも該当するものか否か、証するを得ない。そこで本稿では、解題としては均衡を欠くのであるが、先ず本書成立の大まかな脈絡と本文の性質について述べることを責務としたい。また便宜上、失われた部分には本稿解題の該当しない可能性について逐一重説しなかったことを諒とされたい。

「雑抄」の名が体する事柄は、やや広範に亙ろう。書名としては固有性に乏しく、恣意的な抄出の謂とも受取られる。同名の書に敦煌出土の幾つかの類書が知られているが、これらは唐代に成立した日用通俗の金句集で、本書とは直接の関わりを持たない。但し六朝以来、多くの書巻より要処を抄出した書物が流行して類書の編纂へと向かっており、夙く『隋書』経籍志の子部雑家類に著録する「雑書鈔」等もこの種の編纂物であったと見られ、敦煌出土の『雑抄』は、抄出編纂の営為が唐代にも継続して行われたことを示している。こうした趨勢は、巻子本を中心とする書物の受容に関係してのことと考えられ、詩文についても同様の現象が認められる。集部の場合、具体的には総集の成立として顕れており、多くの書名が『隋書』経籍志の総集類に見える。この中には「雑詩」「雑詩鈔」「詩鈔」「詩集鈔」等、「雑」「抄」の語を冠するものがあり、六朝から唐初にかけて、総集の称謂としてかかる書名の通行したことを窺わせる。『遍照発揮性霊集』巻四に収める弘仁三年（八一二）の空海の「献雑文表」目録に「雑詩集」「雑文」等と見えるのも、「王昌齢集」「朱千乗詩」等との対比から考えて総集の謂と見做されるから、中唐の頃にもこうした編纂が行われたものと思われる。本書の内容に照らすと、「雑抄」の名はこれらの例に適い、複数の詩巻より要処を抄出した総集の編纂を称するものであろう。固より本邦にも同名の書は多く、その内容も多岐に亙るから、書名については以上を参考するに止めたい。

本書の内容を概観するため、以下に篇目表を掲げる。これらは篇題と作者名について、本文中の文字を抽出、列挙したものである。但し注釈的な題辞は省略してある。〔　〕内には私に詩の存佚と形式等を注した。これらが通行の形と異なる場合には※以下にその旨を記したが、小異は採らなかった。

1　樂府詞　令狐公　〔佚・七言古詩・四句〕
2　妾薄命　李端　〔存・雑言古詩・抄四句〕
3　古別離　〔存・五言古詩・抄二句〕
4　長安路　錢起　〔存・五言律詩・抄二句〕※皇甫冉作
5　畫角歌　李端　〔佚・七言古詩・二四句〕
6　白帝祠歌　〔佚・雑言古詩・三〇句〕
7　送春曲　〔佚・雑言古詩・一〇句〕
8　夢仙歌　〔佚・七言古詩・二二句〕
9　荆門雨歌　〔存・七言古詩・三〇句〕※存二四句
10　玉女臺歌　〔佚・雑言古詩・二八句〕
11　周開射虎歌　〔佚・七言古詩・二四句〕
12　折楊柳　〔存・五言古詩・二〇句〕
13　楚王曲　〔佚・七言古詩・三〇句〕

14 胡騰歌 〔存・七言古詩・一八句〕 ※存一九句
15 離歌辭 〔存・七言古詩・二八句〕 ※題雜歌辭
16 莫攀柳 李益 〔存・五言絶句〕 ※題金吾子
17 落花詞 李南 〔佚・五言絶句〕
18 秋猿吟 屈晏 〔佚・七言古詩・一六句〕
19 長門詞 朱千乗 〔佚・七言絶句〕
20 霍將軍妓 崔國輔 〔佚・雜言古詩・二五句〕
21 李尚書美人歌 沙門法振 〔佚・雜言古詩・二四句〕
22 少室山韋鍊師昇仙歌 皇甫冉 〔存・七言絶句〕
23 薊門北行 李義仲 〔存・五言古詩・抄二句〕 ※李希仲作
24 題遐上人院畫古松歌 朱灣 〔存・雜言古詩・一六句〕
25 湖中對酒行 張謂 〔存・七言古詩・一二句〕
26 宛丘李明府廳黄雀吟 崔曙 〔佚・七言律詩〕
27 採蓮女 李白 〔存・七言絶句・抄二句〕
28 宮中行樂 〔存・七言絶句・抄二句〕
29 〔存・七言絶句・抄二句〕
30 放歌行 張謂 〔佚・雜言古詩・二四句〕
31 梅花行 鄭遂 〔佚・五言絶句〕
32 苦熱行 劉瓊 〔佚・七言古詩・一二句〕
33 扶風行 〔佚・七言古詩・一六句〕
34 彈碁歌 李傾 〔存・雜言古詩・一二句〕 ※李頎作
35 韓大夫駭驃馬歌 張九齡 〔存・七言古詩・二六句〕 ※題衛尚書赤驃馬歌 岑參作 存二八句
36 蜀道招北客吟 岑參 〔存・散文〕 ※題招北客文

この中、多くの詩篇は作者名注記を欠くのであるが、3・9・12・14・15は李端の別集に見え（3は『楽府詩集』巻七一、9は『唐百家詩選』巻一、15は『文苑英華』巻三四九にも李端の作として収める）、28・29は李白の別集に見える（両者共『才調集』巻六・『楽府詩集』巻八二・『唐詩紀事』巻一八に、また29は敦煌出土の「唐人選唐詩」・『文苑英華』巻一六九にも李白の作として収める）ので、先行の注記を採って、3・6～15は李端、28・29は李白、33は劉瓊の作として表記するものと見たい。本書小題には「曲下」と標するが、篇題からも知られるように、広義の楽府詩に属する作品が集められている。3・12等いわゆる楽府題に当たるものもあるが、寧ろ新たに題せられた歌行の類が多い。古体を採る作品が多くを占めるが、近体の形式に従うものもある。雑言詩の多くは五・七言句を雑えたもので、7・14・20・21・30など、三五七言や例外的な形式のものも含まれる。36は韻文とは見做せないものであるが、受容の実際に即して抄入したものであろうか。

本書の特徴として第一に指摘すべき点は、いわゆる佚詩を多く含む所にある。本稿で存佚の基準としたのは『全唐詩』及びその輯佚類の採否であるが、輯佚については『全唐詩逸』『補全唐詩』『補全唐詩拾遺』『全唐詩補逸』『全唐詩続補遺』『全唐詩続拾』等、比較的見易いもののみに拠っている。また4・16・35の如く、作者名や詩題を通行本文と異にする場合にも留意したが、なお徴すべきを失しているかも知れない。その限りでは、全篇の半数に当たる十八篇を佚詩で占めることとなり、多くを減ずるものではなかろうと考える。なお本書中には数句の抄出に止まるものもあるが、表中「抄幾句」と注記した以外の諸篇については、詩の形式や内容から見て何れも一篇の全載を意図したものと考えられ、佚詩についても、脱字脱句を例外として、一篇を

完存するものと判別した。作者毎には李端の十三篇が纏まっており、李南、屈晏、鄭遂、劉瓊の四人はこれまで作詩の事蹟自体が伝えられていない。詩の形式に注目すれば、大概は七言の古体を基調とするが、30は「春、秋、易往、難駐」の一・二字対より始め、換韻して十二字の対に至る稀な形式を備え、『唐詩紀事』巻三十九に自居易、元稹、令狐楚等の単題の「一字至七字詩」があって、中唐期にかかる遊戯的詠法の行われたことが知られる。その他、唐代楽府詩の実情を伝える本文として資する点があろう。

本書に収める詩篇の作者を通覧すると、凡そ盛唐から中唐初期の詩人で占められていることに気付く。次に詩人の活躍時期を大略の年代順によって掲げる。生歿年については小川環樹氏『唐詩概説』等を参照した。

張九齢　（儀鳳三年～開元二八年）〔六七八～七四〇〕
・李　頎　（天授元年～天宝十年？）〔六九〇～七五一？〕
・李　白　（長安元年～宝応元年）〔七〇一～七六二〕
崔　曙　（長安四年？～開元二七年）〔七〇四？～七三九〕
崔国輔　（？～天宝十四年）〔？～七五五〕
・岑　参　（開元三年～大暦五年）〔七一五～七七〇〕
・錢　起　（開元一〇年～建中元年？）〔七二二～七八〇〕
・皇甫冉　（開元一一年～大暦二年）〔七二三～七六七〕
李希仲　（？～天宝年間～？）〔？～七四二―七五六～？〕
張　謂　（？～建中元年？）〔？～七八〇？〕
・李　端　（天宝二年～建中三年）〔七四三～七八二？〕
李　益　（天宝七年～太和元年）〔七四八～八二七〕
釈法振　（？～大暦貞元間～？）〔？～七六六―八〇五～？〕
朱　湾　（？～貞元元和間～？）〔？～七八五―八二一～？〕
・朱千乗　（？～元和元年～？）〔？～八〇六～？〕
令狐楚？（大暦元年～開成二年）〔七六六～八三七〕

巻頭の作者「令狐公」は、歌行を能くし年代も合致する令狐楚を指すものと仮定した。李南、屈晏、鄭遂、劉瓊の伝は知られず、他の詩人は八世紀から九世紀前半に纏まっているのでその頃の作家と想像するが、確証はない。

これらの作者群について、次のような点に留意すべきであろう。先ず本邦承和年間（八三四～四八）に将来され平安鎌倉期を通じて斯界を風靡し、歌行をも能くした白居易の作と、白詩と共に受容された元稹の作が見られないことは、平安期の撰述に係る『千載佳句』や『和漢朗詠集』『新撰朗詠集』等、元白を中心に唐人の詩句を集めた本邦在来の秀句選集の在り方と大きく異なっている。このことは『雑抄』に詩を収める作者が、最末の数人を除いて、白居易等が活躍を始める元和年間（八〇六～二〇）以前の詩人から構成されており、最も遅い朱千乗や令狐楚の場合でも、元和以前に詩名があったであろうことと軌を一にしている。つまり『雑抄』乃至その撰述資料は元和年間までに成立したもので、元白将来以後の邦人の撰に依らない可能性が指摘される。更に、漢土には長く伝を絶った作者である朱千乗の名を存することに注目したい。朱千乗の詩は『全唐詩』に入らず、市河世寧（寛斎）の『全唐詩逸』に紹介されるまで忘れ去られていたが、寛斎は『千載佳句』に拠って両句を自著に抄入しており、これらの詩句が弘法大師空海の将来（或はその撰）に係る『新撰類林抄』（以下「類林抄」と簡称）に由来すること、

小川環樹氏に言及がある（「『新撰類林抄』校読記」『中国文学報』十一、昭和三十四年十月）。また近年の『全唐詩続拾』に収められた三篇も『類林抄』と『弘法大師正伝』に拠る輯佚に係り、後者は空海の帰朝に際する餞行の詩になる。陸心源の輯めた『唐文続拾』巻五にも朱千乗の文章を収めるが、これは『弘法大師正伝』所録の詩と同時の序文で、やはり我が国で編せられた空海の諸伝より出たものであろう。要するに、朱千乗の名は空海に関わる限られた資料にのみ顕れるもので、空海送別詩宴への出詠や、先述の「朱千乗詩一巻」献上のことから見て、空海との直接の関係を背景とすること、小川氏の所論（同前）と同様である。また空海の帰朝は唐の元和元年（八〇六）即ち本朝大同元年のことであるが、この年次を得ることは、『雑抄』の作者が元和頃を下限として元白の作を含まないことと符契を合するもので、本書成立と空海の帰朝に何等かの関係が想定される。そして、本節に述べた『雑抄』作者群の示す様態は、ほぼそのまま『類林抄』にも当嵌まることを思うべきであろう。前掲の作者表に「・」符を冠したのが『類林抄』と重複する作者であるが、『類林抄』のその他の作者も、ほぼ盛唐から中唐の前半に集中している。また重複する作家は皆早くから別集を存することが『新唐書』藝文志以下、宋代諸家の目録に見えるが、朱千乗のみ別集の著録や伝本を欠き、唯一空海の表に「朱千乗詩一巻」の見えることは、両書と空海との関わりを際立たせている。但し『雑抄』と『類林抄』に直接の関係を想定する場合には、分類標記の整合性が問題となる。現存の『類林抄』残巻は「巻第四、第三帙上、春、閑放上」の標記を有するが、『類林抄』の部立は詩の主題に拠る分類に基づくものと見られるのに対し、『雑抄』は詩体の種別に拠り、一様でない。これも『文苑英華』や本邦の『文華秀麗集』『経国集』等にそうした例があるように、近体詩については主題を以て分類し、楽府詩や歌行の類については別の部立を設けたものと見做せば、両者が対応関係にある可能性は認められよう。しかし『類林抄』で第四が「春、閑放上」であり、近体詩の巻々の後に第十四として「曲下」が置かれたとすると、巻数の分量が足らないようにも感ぜられる。結局、両者に直接の依拠関係が存するかどうかを判ずることは難しく、当面は『類林抄』に限らず空海将来の書籍に由来するものと考えて置きたい。また『日本国見在書目録』を検すると、本書に見える作者の別集については「李白歌行集三巻」と「李益集一巻」を数えるのみであり、他に補うべき記事も得ないことから、本書が邦人の撰述に係るとすれば、何等かの総集に依った可能性の高いことをも附言して置きたい。以上、本書が唐人の撰に係るものか、空海を含む邦人の所為に依るかも明らかではないが、本書成立の大まかな脈絡は看取されよう。なお醍醐寺の仁海が収蔵した聖教類を記し入寂後間もなく門人によって編纂されたとされる『小野経蔵目録』には空海の筆跡と伝える「雑抄物一巻」を著し、江戸初期に智積院に学んだ恵範の著録になる『諸師製作目録』の空海の項には「文筆眼心抄」「玉造小町子形衰記」等と並び「雑抄出二巻」「雑抄一巻」を録するが、これらの著録と本書との関係については不明とせざるを得ない。

ここで本書と日本漢学史の関わりについて述べて置きたい。但し本書或は本書所収詩が我が国同時代の詩句や選集に直接の影響を与え、また引用された例は、今のところ見出していない。抑も平安朝に於ける楽府詩の受容、製作は限られた範囲でしか行われておらず、本書所収詩に類似する作例も決して多くはない。しかし例外的に嵯峨天皇の治世およびその在世中には、邦人によって狭義の楽府詩、歌行や詞までもが製作されており、勅撰三集と呼ば

れる『凌雲集』『文華秀麗集』『経国集』にこれらの諸篇を見出すことができる。詩の主題によって分類された後二集は特に「楽府」の部立を設け、「雑詠」の部に於いても歌行の類を収めている。これらの多くは嵯峨天皇を中心とする君臣間の製作になり、例えば『凌雲集』嵯峨天皇の首に収める雑言の「神泉苑花宴賦落花篇」には、小野岑守等廷臣の作も伝えられ、『経国集』雑詠に収める「清涼殿畫壁山水歌」には菅原清公、都腹赤、滋野貞主の唱和詩も見える。またこの時代の詩人には別集が伝わらないから詳しくは知ることができないが、空海の別集『遍照発揮性霊集』巻一にも雑言の歌行が見え、併せて当時の好尚を知ることができる。ところが、やや時代の下る島田忠臣の『田氏家集』や菅原道真の『菅家文草』『菅家後集』を見ると、一転してこうした作品は姿を消し、田氏に「春風歌」一篇を見るけれども、この篇等は政教的色彩が強く、形式上も近体詩の格律を正しく踏襲しようとしている。また道真以降では、模範文例集である『本朝文粋』や『朝野群載』に載る数篇を除いて作例を見出すことが難しい。諸家の製作は七言律詩の形式に拠るものが殆どで、句題詩の詠法に従って対句の彫琢に腐心し、偶かに古体を採る作例があっても大抵は白居易の影響を受けた長篇の古調詩か「新楽府」の模倣である。『千載佳句』や『和漢朗詠集』に『雑抄』と共通の詩篇が引かれないのも、これらの趨勢からすれば当然であろう。嵯峨天皇の時代に楽府詩の製作が為されたのは、遣唐使の往来を背景とする漢風の謳歌に任せ、やや俗に亙るものまでも含めて同時代の詩篇を受入れた結果と見られる。このことは『雑抄』の将来もしくは撰述が空海帰朝の頃、即ち嵯峨朝に係ることと正に吻合し、『雑抄』の存在は、嵯峨朝に於ける楽府詩製作に寄り添う漢学情況の一斑を窺わせるもの、と見做されよう。

次に本書本文の性質について、通行本文と対照して考えてみたい。ここでは例として9の「荆門雨歌」（本文七二頁上段）を挙げる。同篇は李端の別集と宋の王安石撰『唐百家詩選』巻一にも収められ、当該の巻には宋紹興間刊本を存しているから、本文の比較上、便宜を得られる。以下同書本文を選本と略称する。別集では明弘治正徳間刊（銅活字）『唐五十家詩集』所収『李端詩集』巻上、清光緒二十一年江標刊（影南宋書棚本唐人小集）『唐五十家小集』所収『李端詩集』巻上、明万暦四十八年鈔（清黄丕烈校）『李校書集』巻上、清初期鈔（『全唐詩稿本』）『唐李正己詩集』の五種を用いる。以下これらを別本と略称し、また選本とも共通する場合には諸本と称する。

先ず『雑抄』の本文が孤立して意の通じ難い箇所を見る。第十一句「重陽火點過欲盡」中の「重陽火點」の文字を、諸本「重陰大點」に作るが、阮籍の「詠懐」詩の第九篇に「寒風振山岡、玄雲起重陰」と、また韓偓の「雨」詩に「樹帶繁聲出竹間、溪將大點穿籬入」とあるのを見ると、曇天の下に大粒の雨滴が落ちる意で、諸本の形でよく意が通る。第十六句「熨牛陂前濕荒戍」の「熨牛陂」を諸本「熨斗陂」に作るが、『輿地紀勝』荆湖北路、復州の章に「熨斗陂」の名があり、江陵に存した「琵琶寺」の名との対偶からも、諸本の形を是と見たい。第二十四句「非關高地商羊舞」の「高地」を諸本「齊地」に作るが、『孔子家語』辨政篇に「齊有一足之鳥、飛集於宮朝下止殿前、舒翅而跳。齊侯大怪之使使聘魯問孔子。孔子曰、此鳥名曰商羊」等とあるのに拠れば、これも諸本の形が正しい。これら『雑抄』の誤りは、皆字形の類似に依る誤写と見てよかろう。当該の篇に限らず全体にこうした例は多く、草体の介在に起因する翻読、転写の困難を感じさせる。また地名、人名

に誤りの多いことを考えると、書写者の属する所も自ずから限定されよう。『雑抄』本文の必ずしも精善とは言えない点、注意を要する。

しかし『雑抄』の本文が通行のものと異なっていても、強ちに誤りとは言えない例も存する。篇題に「荆門雨歌、送従兄赴夔州」とある中、別本では「従」字を欠くが、選本では『雑抄』と同じく「従兄」に作る。また第二十三句「自是湘川石燕飛」の「湘川」を、別本は「湘州」に作るが、選本は同じく「湘川」に作る。「石燕」は『水経注』に「湘水(中略)東南流逕石燕山東。其山有石紺而狀燕(中略)及其雷風相薄則石燕飛」とあって湘水辺の産と知られ、「湘州」も可であろうが、徐陵の「移齊文」に「湘川石燕、自然還舞」とある例を見ても、「湘川」の本文を退けるものではない。また第二十四句「非關高地商羊舞」の「非關」を、別本では「那關」に作るのに対し、選本では同じく「非關」に作る。両者は共に意を通ずるが、杜甫の「嚴公仲夏枉駕草堂兼攜酒饌」詩の「非關使者徵求急、自識將軍禮敎寬」等、「非關」の例を求める方が易い。『唐百家詩』や『唐五十家小集』は宋本に拠ることを謳っており、宋代には李端の別集が行われたことも諸家の目録に見えるが、現存の平安鈔本である『雑抄』と宋版の『唐百家詩選』が同じ形を取り、両者に直接の依拠関係が認め難いことを勘案すれば、夙く別集の本文とは異なる形でも行われたと考えるのが妥当と思われる。

右の考えが認められるならば、次のような例も検討に値しよう。第十句「浦裏人家收鬧喧」の「收鬧喧」を諸本では「收市喧」に作るが、杜甫「雨過蘇端」詩の「親賓縱談謔、喧鬧慰衰老」の例を見れば、通韻に従って転倒する『雑抄』の形も可であろう。また第二十九句「今朝把手臨水別」を諸本「今朝拜首臨欲別」に作るが、錢起「山下別杜少府」詩の「把手意難盡」の語を見れば、『雑抄』の形でも意を通ずる。これらの本文は孤例であるけれども、やはり一定の注意を払うべきものと思われる。そして諸本では第三句「荆門帶雨狀如何」より第八句「已在昭亦葭莢上」までの六句を全く欠くのであるが、第八句の「昭亦」が「昭丘」の誤写かと疑われる他は、詩の形式や内容に照らしても六句を存することは不自然でなく、諸本に江水の景を写す部分を欠くことは寧ろ不全の感を抱かせる。以上の他にも諸本と対立する形は存するが、その適否を判ずることの難しい場合も多い。また一篇の挙例のみを以て証すべきことではないが、諸本に対する異同に一考を要するものの含まれることは示し得たであろう。

これらの異同を生じた原因について確言することは避けなければならないが、『雑抄』乃至その撰述資料の将来が李端等の在世中に近いことを考えると、別集に収められたものとは別行の本文を反映する可能性があろう。例えば29「宮中行樂」詩は、李白の別集の他に『才調集』巻六や『文苑英華』巻一六九、『楽府詩集』巻八二、『唐詩紀事』巻一八にも収められ、篇名に関しては異同が多いものの、『雑抄』に抄出された両句については一致して「柳色黃金嫩、梨花白雪香」の形を取る。一方『雑抄』では「嫩」を「暖」に作り対立するが、前行同格に「暖」の文字があり、これに引かれたものかと疑われる。しかし『雑抄』の形も孤例ではなく、敦煌出土の「唐人選唐詩」ではやはり「暖」に作る。「暖」は「嫩」と音が近く音通の可能性もあろうが、唐代乃至はそれに近い年代の、しかも直接の関係を想定し難い敦煌と日本の本文が同じ形を取り、それが現行の別集や総集と重ならないとすれば、そこに何等かの通底する事柄を考える余地があろう。また、20「霍將軍妓」の第三句には「凋蟬七葉貴」とあり、この中「凋蟬」の語は意を通じ難い。当該

の句は第一句「十五羽林郎」を受け、これらは『楽府詩集』巻六三に収める後漢の辛延年の「羽林郎」篇を原拠とするから、ここは同音に当たる「貂蟬」の語が相応しく思われる。従って「凋蟬」に作るのは音通によって仮字を用いたものと見られ、本文中こうした音通の文字を存することは、本邦での書承以前に起因する現象と考えられる。また、36の岑参の「蜀道招北客吟」は、蜀の東西南北それぞれについて節を設けて述べる構造を有し、毎節の末に「蜀之東（西南北）不可以往、北客歸去來兮婆」の語を置くことを定型とする。同文は『文苑英華』巻三五八と『唐文粹』巻三三之上に「招北客文」の名で収められ（『文粹』は作者名注記を欠き前文の独孤及を受けるが、従えない）その本文には三者相互に異同を存するが、定型の語を置くことは変わらない。但し『雑抄』に見える最末の「婆」の文字を、宋代の総集には欠いている。この場合の「婆」は語気を表わす助辞と思われるだけに、別集の編纂乃至はそれに準ずる本文整定の際に採られなかった文字を、『雑抄』には却って残しているものと考えられる。また後に篇名の「吟」の文字を失っていることは、同篇の受容の在り方と関係があろう。岑参の現行の別集には同篇を欠くが、その首に冠する中唐の杜確の序には、岑参の小伝を述べる中で唯一「招蜀客歸」の篇に言及し「有識者感歎、姦謀者慚沮、播德澤於梁益、暢皇風於邛僰」と伝えるので、当初から同篇に寄せられた反響の大きかったことが窺われる。既に触れたように、同篇はその形式からすると「曲」の部に入るべきものとも思われず、専ら「吟」の名に因むものと思われるが、語気助詞や「吟」の名を存するについては、文字通り人口に膾炙し吟詠される機会の多かった背景を想うべきではなかろうか。これらの場合から臆測するならば、本書本文は、音通を含む改変を経ながら伝えられ、正統の別集や総集には採られなかった唐代流布の本文に由来することが考えられよう。また唐代別行の本文と思われる中には、単行に近い形で流布したものも含まれるのではないかと推される。

以上、本書本文の性質について検討した。総じて言えば、『雑抄』の本文には屢々伝写の誤りを存するものの、一方では唐代流布の形を伝えている可能性が認められる。先述のように本書が空海の将来資料と関係するのであれば、その源流は中唐半ば頃に西京の坊間で蒐集された書巻にあろうから、当時の本文を保存することも当然の帰結と見做し得る。本書の特色は先ず佚詩の収載にあろうが、それ以外の諸篇にも検討すべき異文を多く留めていることは疑いなく、また一書の伝存は本邦嵯峨朝の遺風を伝えるものでもあり、巻十四のみの断簡と雖もなお貴重すべき点があろう。以下翻印に附して、本文の紹介を期する所以である。

凡　例

一、翻印本文の行款は原則として底本に従い、校字符号等も現状の侭とした。
一、翻印本文の字体は原則として正字体に改めた。
一、破損、虫損等により判読できない文字は、□を以て示した。
一、誤写等により意の通じ難い箇所で、本来の文字が推測される場合は（　）内に、脱字、脱句等の想定される場合には〔　〕内に、私案を呈示した。
一、一面の首行上欄に紙数と表裏の別を標示した。但し袋綴に見立てた場合の張数を用い、料紙の別を『　』で、紙面の別を「　」で示した。
一、毎篇の題辞上欄にアラビア数字を冠して詩篇の序を示した。

（住吉朋彦）

(1裏)

雜抄卷第十四

曲下

1　樂府詞　　令狐公

秦箏慢調當秋日玉指頻移碎音律清風分別

作山水磬妙曲冷〻度華室

2　妾薄命　　李端

顏容南國重名字北方聞　從來閉在長門者

必是宮中第一人」

(2表)

3　古別離

遠山雲似(蓋)極浦樹如毫

4　長安路　　錢起

高樓臨積水複道出繁花

5　畫角歌送柳將軍赴安西　　李端

紫髯健者涼州兒能將畫角向西吹一聲迴

(2裏)

發思鄉陌老馬迴頭雁垂翮如登青瀧見臨

洮若映黃雲望張掖風喧亭障一時暗雪覆

沙田千頃白離〻榆葉落危樓漫〻蒲泥對

弘柵細音嗚咽和幽澗高響蕭條愁遠客

曉來交入玉關聲萬人流渡邊思生降胡部

(3表)

落眠(眠カ)中出邏迤前胡五十城伊西去天一萬里」

所亙曲盡將軍起男兒報國肯在身蘇武

生還李陵死天子如今未尚文儒生安敢

議而勳今夜轅門歌戰角老將壯志贈

將軍

6　白帝祠歌送客

蒼然白帝祠近出當三峽合沓楚雲齊微

明湘水匝祠前山腳入江心紫瓣(辨カ)紅苔樹陰」

(3裏)

〻遊商再拜向竹林檉栝飄〻堂廡深泉

根石脈盤危逕猿吟鶯啼不可聽後侶徒

方擊极催前船已許楚香(焚カ)哀巖潭曲屈

連　渴跳沫喧豗濺薜蘿陳筵布席情

轉多出門之後何過別有迎神乘夜至雞兼

數頭酒一器女巫進舞在庭羅裙轉提青

(4表)

苔地濫瀋欲明　盡落杜漿向暈人初醉

蕘人治馬哀無聲皮鼓銅盤自喧沸

相神詞一道君重枝疊葉便氤氳平洲

迴樹眼前幽蘆荻麻(脱アルカ)似虛　遙知此去應

流渡先述蠻風使爾聞

7　送春曲

春去也留春不得上城看草多兮樹少千里萬
里青漫〻憑睥睨渡瀾(欄カ)干忘機辭也(世カ)易將
老別花難寄語天邊遊宦者不如少壯在長安

(4裏)

8　夢仙歌

行尋道士臥溪頭忽見崑崙十二樓山上晴明
山下雨阿母樓中多侍女星冠月蓋盡天官身坐
雲車鳥傳語牀前童子十四五竝膝垂鬟調
律呂須臾白日滿青天玉管發聲金鳳舞智
瓊臂上留香澤引我圍碁坐盤石綠蘿覆地
不通人點勢開圖春景夕往時劉阮思歸去來
到晉家頭已白莫人閒(說アルカ)七代孫甘爲鬼籙百年客
愚儒本不學仙經別卻花源各醉醒覺看仙
岳都無處悵望波中一點青

(5表)

(5裏)

9　荆門雨歌送從兄赴夔州

余兄佐郡經西楚餞行因賦荆門雨荆門帶雨
狀如何灑櫚霑楓揚素波〻心雨處紛可望繡
羽將雛競浮颺纔離巫峽杉栝中已在昭亦(丘カ)葭
莢上霹〻燮〻聲漸繁浦裏人家收鬧喧重陽(陰)
火(大)點過欲盡醉(碎)浪柔文相與翻雲開悵望荆渝(レ)路衡(レ)
萬里青山一時暮琵琶寺裏響空廊熨牛(斗)陂前
濕荒戍沙尾長檣發漸稀竹竿草屬涉流歸夷陵
遠色未成燒漢上遊仙(個)始濯衣船門相對多商
估葛服龍鍾蓬下語自是湘川石燕飛非關高(齋)
地商羊舞慣爲洛(江)客念江行腸斷秋荷雨打聲
摩天古木不可見住岳高僧空得名今朝把手
臨水別遙憶荆門雨中發

(6表)

(6裏)

10　玉女臺歌送客

指嵩陽以送君對千里之秋草三十六峯皆碧色
玉女臺　號獨好古來學仙難以力眼見仙人身
亦老武皇厭世幸山多天下名山築道馳(レ)朱顏皓
齒從如雲清晨侍謁玉女君紅光志氣忽開散雀
扇成行兩句分笑騎斑鹿霞上立空裏簫韶次第
聞乃出素書授赤帝汝無仙骨難天羣名馬千蹄
非羽翼何須遠遊損顏色金樓照耀不可親玉輦
迴時空歎息上能方士相繼死帝學長生猶未已年
〻浮海困千人那及垂衣安萬里故有　山歸未期羨
君先生隱明時若到轘轅十二曲爲行一曲一相思

(7表)

(7裏)

11　周開射虎歌

寒山老虎眉額　含威蓄毒牙爪長捎人不着羞
卻去突入城邊最深樹垂頭宛尾潛領時占盡西
郊向田路周郎世　爲將軍能弓解劍天下聞殺
賊膽成思殺虎獨立人前始武知レ忽然虎騰馬又
盤壯夫腳動不敢者(君カ)中絃宛轉未及倒左右無聲
毛髮寒須臾目瞑涎滿口殘喘將微卻成吼迴看
兩箭尚有餘始知覺諸君難出手向晚揚鞭入鳳
城千車萬馬隘難行將軍顏色不可見颯踏塵中
有過聲鄙儒曾忝朱門客願以狂歌記功績

(8表)

12　折揚柳送別

東城攀柳別柳葉低着草少壯莫輕老年(年輕年)〻有人
老柳發遍川崗登高堪斷腸雨煙遙漠〻河樹近
君鄉贈君折楊柳顏色豈能久上客莫霑巾佳
人正迴首新柳送君行古柳傷君情突兀臨荒渡
婆娑出舊營(隨)家兩岸盡陶宅五株平且暮

(8裏)

13　楚王曲

章華宮殿出城墻複道連樓斜復長有時秋月
明如畫紅粉飄颻侍楚王舞人雙起腰支弱廣袖
橫垂度高閣鳳顧鸞移立欲高寶釵忽動金
鈿落息嬌不語渡(渡)長流轉面吁嗟滿席愁君王
罷酒大臣懼願以同盟鳥(免カ)舊讎皷　遊女妓乘文
馬仰望鑾輿星宿下玉珮方昇璪瑁牀珠簾蓋
着瑠璃瓦高唐神世(女カ)本難逢漢水巴江波浪重
一遊雲夢三千里多在閩(蜀カ)山十二峯誰(知伍)員顛倒事
發堀(掘カ)先君逞其志愛女因將妻下臣長男遂被諸
侯棄令尹無謀可奈何昭君既歿禍還過張儀舊(尊カ)
地不足恨白起屠城怨最多欲識楚家江上曲請
君聽唱郢中歌

(9表)

14　胡騰歌

胡騰身是涼州兒肌膚如玉鼻如錐橦布輕衫
前後卷蒲陶長帶一邊垂帳前跪作本音語拈
襟擺袖爲君舞安西舊將收淚看洛下詞人抄
曲與揚眉瞪目踏花氈紅汗交流珠帽偏醉腳
東傾又西倒雙靴柔弱滿燈前環行急蹴應
亂節反手叉腰如卻月絲桐忽盡一曲終鳴(嗚)〻畫
角城頭發胡騰兒(一句脱)故鄉路絶知不知

(9裏)

(10表)

15 離(雜)歌辭呈司空曙

溪水至清泥卽濁松枝至勁蘿卽弱十三女子嫁他
兒顏色如花終莫索蘭生當門燕巢幕蘭牙未
吐燕泥落爲姑偏忘(忌)話諸嫂良(諸嫂良作)婦方嫌壻家惡 」

(10裏)

人生鑒照貴自知無鹽何用妬西施秦庭野
鹿忽爲馬巧僞亂眞君試思伯奇掇蜂賢父逐
曾參殺人慈母疑酒沽千日神不醉琴弄一絃心
已悲我問善交無爾汝讒口甚甘良藥苦山雞錦
翼豈鳳皇隴鳥人言是鸚鵡向排(翅)非才徒隱竈田
父(文)有命那關戸犀燭行江見鬼神木人登席亦(上)歌 『

(11表)

舞平(樂)生東下終歸趙揚(楊)虎北轅翻適楚世閒反
覆不易陳咸此贈君淚如雨

16 莫攀柳　李益

繡帳博(山)金鑪銀鞍馮子都黃昏莫攀柳驚起欲
栖烏

17 落花詞　李南 」

(11裏)

桃李蹊初合逢春遍吐花狂風不解惜吹落萬
人家

18 秋猿吟送別　屈晏

巴東三峽巫峽長西陵古戍寒蒼〻雙峯峭絶開
石關孤猿夜啼寒山月沙頭戍客久不歸此時相
看淚沾衣孤帆(水)宿白波夕絶澗深山黃葉飛上山
下山草逕澀竹陰啾〻露□(汗損)濕江清月曉夜影寫 」

(12表)

走木啼風曙聲急何時當作白頭翁拔劍入林哀
叫窮忽愁羣嘯不知處唯見陽臺十二峯

19 長門詞　朱千乘

雪澹梅枝御柳風春鶯何囀妾愁中君王寵愛
偏前殿不許長門音信通

20 霍將軍妓　崔國輔

十五羽林郎美人邯鄲倡凋蟬七葉貴珠翠一團 」

(12裏)

香雲母帳鬱金牀眞珠簾下點新粧紅輕兩瞼
桃花嫩黛淺雙眉柳葉長(煩カ)(二字脫カ)嫵憮半香醋傾城拭目
爭一顧商歌白璧曾幾雙買笑黃金不知數向晚
嬾登紅粉樓垂簾起坐彈箜篌新聲瀝〻珠絃
裏羌曲星〻纖指頭玉戸查(金カ)堂開枕障風前歌
管何寥亮愛詩不放詞客歸把酒先邀阿郎唱興 『

(13表)

中不覺夕陽傾五馬踟躕秋月明他日珠門君莫
閉時〻來聽繞梁聲

(13裏)

21 李尚書美人歌　沙門法振

昨夜巫峽山先起陽臺女今朝香閣裏獨伴楚王
語豔揚(陽カ)灼〻河洛神珠簾繡戸青樓春能彈
箜篌弄纖指愁殺門前少年子笑開一面紅粉粧東」
園數樹桃花死朝理曲暮理曲獨坐窗閒一片玉
行亦嬌坐亦嬌日夜令人魂膽銷使君從此立五
馬飛燕流心傾漢朝玉房繡戸紅地爐金樽合榼
傾屠蘇解珮時〻歇絃管芙蓉帳裏蘭麝滿
羅衣任裁香不斷滅燭仍嫌春夜短

22 少室山韋鍊師昇仙歌　皇甫冉

紅霞紫氣盡氛氳絳節青童迎少君忽從」
林下升天去空使時人禮白雲

(14表)

23 薊門北行　李義(希)仲

前軍鳥欲斷格鬬塵沙昏

24 題遐上人院畫古松歌　朱灣

石上盤古根謂言天生朽安知草木性變在畫師
手陰深方丈閒眞赴(趣)幽亦閑木文離披勢搓捽中裂
空心火燒出掃成三寸五寸枝便是千年萬年物」

(14裏)

苺苔濃澹意不同一面死皮藏蠹蟲風霜未必來
到此氣色杳似寒山中孤標可翫不可(取)敢使
林公道場古

25 湖中對酒行　張謂

夜坐不厭湖上月晝遊不厭湖上山眼前一樽常自
滿心中萬事如等閑主人有來百餘石濁醪數斗應』
不惜只今相見不盡歡別後相思復何益茱萸灣
頭歸路賒願君且宿黃公家風光若此人不醉參差
孤負東園花

(15表)

26 宛丘李明府廳黃雀吟　崔曙

鳴琴作宰訟庭空賀雀因巢廨宇中決起不離」
當砌樹歸飛時逐傍簾風場邊啄粟寧堪比
篋裏銜花僅欲同會取玉環來報德今君四代
爲五公

(15裏)

27 採蓮女　李白

紫騮嘶入落花去見此踟躕空斷腸

28 宮中行樂

29 繡戸香風暖紗窗曙色新
柳色黃金暖梨花白雪香

(16表)

30 放歌行　張謂

春秋易往難留夜苦長晝苦短秋露迎寒春
風送暖昨見鶯初囀今看雁已飛林花暫時昭
灼春草幾日芳菲以我老翁長寂寞歡君少年
且行樂匣有琴兮何須不彈樽有酒兮何須不酌
不能燒金爛玉隱青山不能懷沙抱玉沈(石カ)流水不
能應聘棲遑學魯仲連不能著書淡薄似蒙莊
子君不見梁孝王宮中狐兎穴君不見魏武帝臺
邊烏雀吟君不見秦(李)都門外歷〻荆棘墓君
不見北邙山頭青〻松柏林

(16裏)

31 梅花行　鄭遂

適過山頭驛梅花數朶新一枝今在手行路盡
知春

(17表)

32 苦熱行　劉瓊

苦熱不必登火山苦熱不必居炎州洛陽中天
日當午赫曦但畏金石流蟲蛇出穴滿平地烏
鳶呵〻飛欲墜陽精火雲上連天草木如燒川
若沸脫巾解帶心欲燃持瓶汲井思寒泉增冰
積水時未至無可奈何徒怨天

(17裏)

33 扶風行

主人彈絃正摧藏客子撫劍心慷〻少年奮節
徇邊功流離苦心在戰場窮陰十月度絶塞胡
風吹雪天茫〻野泉冰堅渴獸死樹枝凍落宿
鳥彊連年進軍至西北逕度月氏通絶域遙望
漢庭千萬里骨肉辛酸氣塡臆窮邊往返四十
年白首還鄉人不識將軍誰得佩侯印山中枯
骨過萬億

(18表)

34 彈碁歌送崔參軍還常山　李傾(頃)

崔侯善彈碁巧妙盡於此藍田美玉滑如紙黑白
相分十二子緣邊度隴未足佳鳥跂星懸危復斜
迴摽轉指連飛掣拂四取五如趨花合坐高聲唱
絶藝仙人六博何曾計一別常山道路賒爲余更作
三兩勢

(18裏)

35 韓大夫駬驃馬歌　張九齡

君家駬驃畫不得一團旋風桃花色紅纓紫
韁珊瑚鞭玉鞍錦帔黃金勒請披(被)出看君乘騎(衍アルカ)
馬尾長慧地(彗カ)如紅絲自矜諸馬皆不及卻憶百
金新贖時龍街紫陌鳳城內傾國見者誰不愛
鳴鞭驟急白汗流弄影行嬌碧蹄碎紫髯胡

(19表)

雛金鏤刀平明剪出三騣高瀝上牽來獨意氣
眾中騎出偏雄豪始將獵向南山口城北狐兎不復
有草頭一點疾若飛卻使鶬鷹翻進後憶昨看
君騎未央玉珂擁瑿滿路傍故知邊將實富貴可
憐人馬相輝光待君來(東)去掃胡滓爲君一日行
千里

(19裏)

36　蜀道招北客吟　岑參

蜀之先曰蠶叢兮縱其目以稱王當周陵頹兮
亂無紀綱洎乎壯(社)宇從天而降鑨靈泝流而上
相禪而帝據有南國之九世蜀本夷也人皆左其
衽而推其髻及有通乎秦也始於惠王之代五牛
琢而秦女至一蛇死而力士斃二江雙注羣山四
蔽其地卑濕其風脞脆蠻貊新(雜)處顚棘(癸)爲鄰

(20表)

地偏而兩儀不正(脫)薄而四氣(不)均花葉再榮秋冬如
春暮夜多雨朝旦多雲陽景罕開陰氣恒昏
以暑以濕兮爲瘵爲癘氣浥鬱以蒸人吾知重
腿之疾將嬰乎爾身蜀之不可以處北客歸去來
兮娑(婆カ)其東則有大江沄〻下絶地垠百谷相呑
出于荆門突怒吼劃附爲太白渤溯潏(レ)澎會于滄

(20裏)

溟跳噴渚渺上濺飛鳥蹙縮盤渦下旋黿鼉三峽
兩壁(壁)亂峯如戟岐岈屹崒洪洞劃圻(坼)高于天霓
雲外水迨盡日無光其下黑穿(窄)瞿塘無底淺處
萬尺啼猿哀〻傷(腦)斷過客復有千歲老蛟能
變其身好飲人血化爲婦人袨服靚粧遊于水
濱五月之閒白帝之戸洪濤塞峽不見灩與翻天
蹴(蹙)地霆吼雷怒復有行舟突然而去人未及顧棹

(21表)

未及擧瞥見陽臺不辨雲雨千里一歇日未
移午須臾黑風暴起拔樹振山走石飛沙波騰
浪翻舟子失據摧檣折竿漩入九泉沒而不還
又(支)體糜散盪入石閒水族呀〻撥刺爭飡蜀
之東不可以往北客歸去來兮婆其西則高山萬
重峻極屬天西與崑崙其峯相連日月迴還閡山(于)

(21裏)

于巔蠻崖盤嶔其壁(天壁)夐絶陽和不入陰氣固
閉千年層冰萬古積雪溪寒地坼谷凍石裂夏
月草枯春天木折蒼煙凝乎黑霧結人墜指
兮馬傷骨江水噴激迴盤紆縈棧壁緣雲鈎連
相撑繩梁巢虛橫踏杳冥下不見底空聞波聲
過者瞿然亡魂喪精復引一索其名爲笮人懸

(22表)

半空度彼絶壑忽如馬(爲)兮又如獲倏往還兮

幸不落復有豪猪千羣突出深榛怒闞〻復

有高崖墮石聲若雷之砰𤦺上敲下磕以(似)火迸

兮滿山流星澗溪忽兮側流林岸爲之頹傾碎騰

狖與過鳥駭木魅兮及山精飛石壓人兮不可行

西有犬戎與此山通形貌類人言語不同氈廬(脫)穹

毳裘蒙茸啖酪啖肉持槍挾弓依草逐泉務

戰與攻其聲如犬其聚如蜂中國之人兮或流落

(22裏)

其中豈止橛鼠茹雪以取活終當鈹其足而緜(緜カ)其

胸泣漢月於西海思故鄉於北風蜀之西不可往(マヽ)

以(こ)北客歸兮去(マヽ)來婆其南則邛來之關大設險艱

少有平地連延長山横亙瀘江隔閡百蠻吁彼漢

源上當漏天靡日不雨四時滂然其人如魚爰處

在泉終年霖霪或時日出狺〻諸犬向天吠日人

(23表)

皆濕覆漏(偏)死腰疾復有陽山之路毒瘴夏凝白

日無光其地曹〻暑雨上濕黄茅下蒸南方之

人不敢過豈止獸踣兮鳥墜吾不知造化何兮

置此方蜀(脫)之南不可以往客歸去來兮婆其北

則劍山巉〻天鑿之門二壁哈呀高岸嶙峋上

柱南斗横鎮于坤下有長道北達于秦〻地神州

中有聖人左右伊皐能致我君雙闕峩〻上覆

慶雲千官鏘〻朝紫宸玉殿(極)鳳(風)鳳金殿騏驎

布德垂澤搜賢修文皇化忻〻煦然如春蜀之

之(衍)北不可以往北客歸去來兮婆

(23裏)